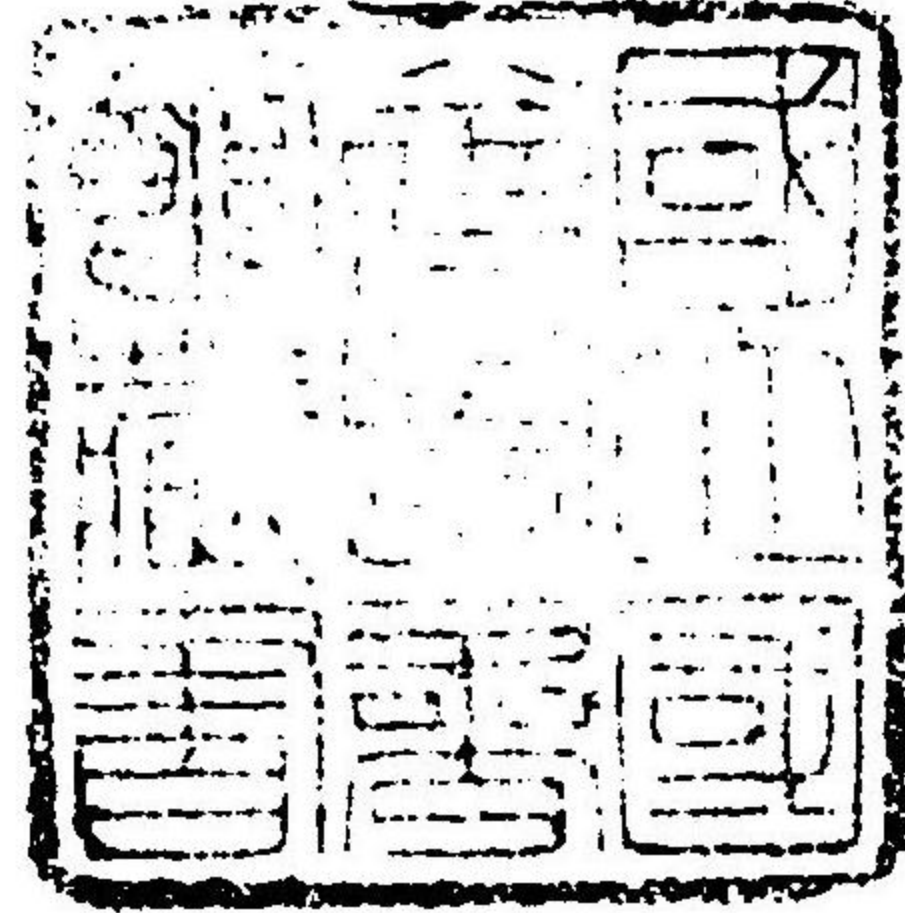


奥羽觀蹟聞老志

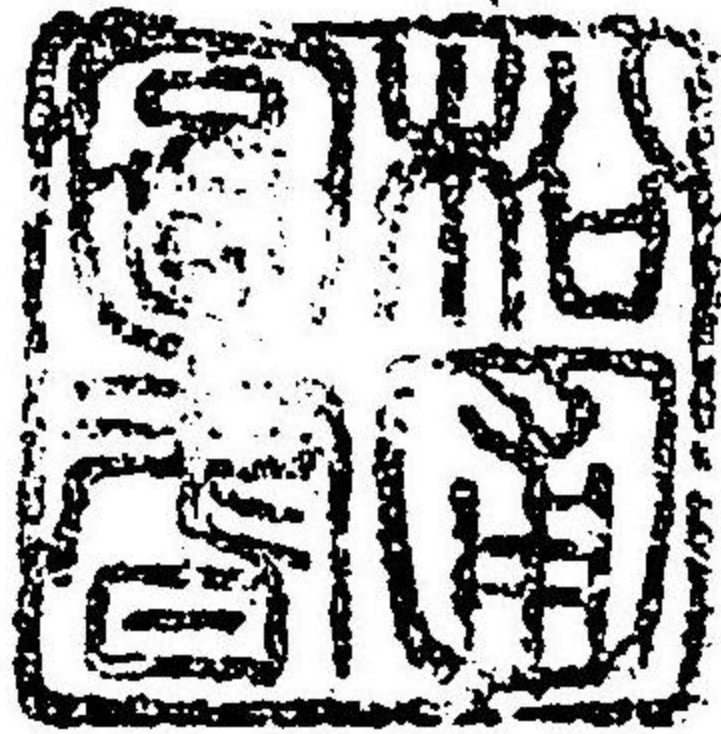
十

291.2  
Sa5310





348441



奥羽観蹟間老志卷之八

黒川郡

仙臺 佐久間義和著

四十五代聖武帝天平十四年正月己巳陸奥國  
言部下黒川郡以北十一郡雨赤雪平地二寸  
四十八代稱徳帝神護景雲三年三月辛巳陸奥  
國黒川郡人外從六位下鞞大伴部弟融等八人  
賜姓鞞大伴連大國造道島宿禰島足之所請也  
寶龜九年夏四月癸巳朔陸奥國黒川加美等一  
十郡俘囚三千九百廿人言曰己等父祖本是王



民而爲夷所略遂成賤隸今既殺敵歸降子孫蕃  
息伏願除俘囚之名輸調庸之貢許之

五十四代桓武帝延曆八年八月己亥勅陸奧國入  
軍人等今年田租宜皆免之兼給復二年其牡鹿  
小田新田長岡志太玉造富田色麻加美黑川等  
一十ヶ郡與賊接居不可同等故延復年

同九年十一月丁亥陸奧國黑川郡石神神社并  
爲官社

五十四代仁明帝承和十一年乙亥十一月己亥  
陸奧國黑川郡大領外從五位下勳閑鞞伴連黑

成授從五位下褒公勳也是磐城臣雄公書生也  
八十二代後鳥羽帝文治五年己酉八月十四日  
賴朝自多賀經黑川郡之玉造郡

神名帳曰黑川郡四座 須伎神社 石神山精  
神社 行神社 鹿島天足別神社

新日吉神社

在富谷村五十二代嵯峨弘仁六年叡岳行尊所  
建有寺號藥師山熊谷寺仍鄉人呼其地稱熊谷  
往昔有十社號十宮後易富谷字有善遊堂清和  
帝貞觀中慈覺所造也



延喜式神祭部云日吉神社比叡神同傳記曰山王權現者欽明元年自天降于大和國磯城上郡而現大三輪神公事根源日吉社者與松尾神為同躰也後白河帝永曆元年十月十六日移日吉神體於東山今野新宮號曰新日吉

飯森社  
在宮床村淳和帝天長中祭熊野有寺曰飯峯山信樂寺藏運慶所造彌陀藥師觀音仁和年中火光孝帝時再造至永和二年道琳者修造之

鶴峯山祠

在同村祭市宮波神賀茂三社推古帝聖德六年所建也藏雄劍一枚長二尺七寸有銘曰備前景元今

稱雷光丸珍藏

七疑峯

巨魁峯 松蔭峯 積倉峯 尖頭峯  
鎌索峯 飛峰峯 太倉峯

三山在宮床村四山在吉田村其山犬牙相列人

疑指示何山矣故鄉人稱七峯一日先君及此事而曾曰中華有九疑稱此山亦須稱之七疑峯自是呼之為其山稱焉相傳賴朝東征之時經歷至于茲和生大夫廣高者獲麋鹿一頭而獻之

舟形嶺



在吉田村祭舟形神祠相傳反正帝時建之土人曰之升澤

古石墳

在大松澤村高九尺廣一尺五寸厚一寸五分石上銘曰元享三年十月三日重高敬白未詳何為設鄉人曰之立石

赤崎社

在駒場村後島羽帝建久二年兒玉彌太郎重成者所建未詳所祭何神也

鶴巢館

在下草村城上有喬松雙鶴來巢仍稱之永祿中黑川安藝守晴氏居之

御所館

在蒜袋村黑川氏祖某自鎌倉來始居此城將軍左馬頭源基氏分流以室町氏族鄉人推而稱御所

八谷館

在相川村安藝守弟八谷冠者居城也

端取城

在志戶田村安藝守長子三郎春氏居之



大童壘

在今泉村安藝家臣大童豐後居之

大衡壘

在大衡村或曰越路館是亦家臣大衡治部居之

登米郡

加賀野城

在加賀野村飯塚修理居館也上有八幡叢祠

太子堂

在同村朱雀帝天慶中源義元所建聖德太子影堂也相傳雲慶所作也

新井田壘

在新田村千葉掃部居之上有明神小社

法華寺

在同村有寺号寶龍山本源寺修日蓮宗寺畔有



二石墳一基長四尺五寸廣二尺石面記題目下有  
有右爲日目上人小祥忌元弘二年二月日門弟  
日位誌字一基長二尺五寸廣一尺五寸爲日用  
上人大祥忌建武二年八月日立之  
葛籠潭

館下有沼碧潭落々鄉人曰之葛籠淵  
保呂羽館

在寺池村城主不相傳  
石神祠

在石森村未詳祭何神傍有愛宕八幡叢祠

雙樹古館

在同村双樹三五郎者居之

彌勒堂

在彌勒寺村本尊坐像長二尺五寸運慶作也有  
寺号長德山彌勒寺

鈴木壘

在同村往時鈴木正齊者居之

諏訪社

在黑澤村未詳何人建之祀焉

八幡社



在上沼村後冷泉帝治歷年中源義家東征之時  
次軍于此地治平之後所建也傍有湖水曰八幡  
湖

上沼壘

在同村葛西家臣千葉豐後居館也豐後後在栗  
原郡若柳新山館而與大崎屢接兵  
千手堂

在大泉村本尊長七尺慈覺作也未詳何人置  
大泉古壘

在同村深堀隱岐者居之

洲前城

在嵯峨立村岩淵信濃居之傍建熊野葦祠

湖水城

在西郡村西郡新左衛門者居之

寺田古館

在森村三浦式部者古館也

明神館

在水越村瀧川右近者居館也上祭明神仍稱焉  
長谷大悲園

在同村有寺号遮那山長谷寺往昔田村麻呂橫



和州長谷觀音長八尺二寸釋惠心作也今猶存焉

中澤瀑布

在樓臺村鄉里之佳觀也傍有古石墳不詳何人立也

馬頭閣

在鱒淵村有寺号高峯山華足寺大同年中田村東征之時乘馬斃于此仍座于此地以建堂置馬首佛

及川古壘

在同村及川紀伊者居之

三神社

在狼川原村祭八幡諏訪愛宕三社未詳其由

小泉大悲閣

在小泉村崇德帝長承二年建之是亦雲慶作也有寺号大白山長泉寺

旗竿城

在同村米谷修理居館也

櫻場古館

在櫻場村櫻場新九郎者居之傍建八幡小社



高梯館タカノ

在淺部村往時二階堂平內者居之

日根牛古壘

在日根牛村城主不相傳

森合 米谷古壘

俱在米谷村兩地不傳城主

善王寺

在善王寺村不詳其事實相傳年代悠遠之古刹也

葛田 赤生津古壘

俱在赤生津村城主不相傳  
森村古館

在森村不傳城主

鵜並古城

在鵜並村中是亦城主不傳

寺池館

在寺池村葛西親族居之



志田郡 續日本紀延喜式和名集並作志太  
今鄉俗作志田從古書

五十代桓武帝延曆八年己巳八月己亥勅陸奧  
國入軍人等今年田租宜皆免之兼給復二年其  
牡鹿小田新田長岡志太玉造富田色麻加美黑  
川等一十ヶ郡與賊接居不可同等故延復年  
神名帳曰志太郡一座小敷玉早御玉神社

古川古城

在稻葉村大崎義直一作義宣家臣新田安藝行遠一行  
賴弟古川刑部持憲居館也大崎始祖伊賀守家  
兼延元二年八月為管領居于大崎焉行遠先祖



亦相從爲世臣有善政行遠繼家居玉造郡新井  
田城後值讒不得止以居城畔之仍天文五年六  
月上旬義直自將兵急攻之行遠自殺持慧亦率  
高清水一迫家族而守古川居城兵勢尤強大義  
直憂之乞援兵于伊達世十四左京大夫植宗君乃  
帥騎兵三千步卒三萬餘向古川義直迎之郊外  
伊達兵直攻南門義直自東臺澁谷笠原等亦將  
一千兵而相從急附城門伊達家臣濱田伊豆波  
山丹下內崎典麻國分彈正遠藤左近等先登而  
敗西門牧野安藝亦攻北門中野上野長江播摩

宗武等以黑川宮城兵二千是亦耐城壘屏下攻  
之急城兵纔三百然義氣勇敢以死相支十九日  
我兵進而燒外郭二十日夜城危急廿一日停午  
城主持慧自執刃趣火死行年三十六歲弟安藤  
丸十四歲子三郎直植十六歲俱自殺持慧老母  
自憤怒執戈衝中堅奮戰殊甚遂中矢而死從者  
豐島佛坂兄弟五井伊豆入道父子大伴常廣等  
六十餘人或戰死或自盡城遂陷天正中古川彈  
正者居此城主君大崎義隆依遲參罪亡滅大閣  
令木村伊勢守彌市左衛門相繼爲城主



按室町時世無延元年号蓋後光嚴帝延文二年丁酉乎

緒絶橋

古川驛中小板橋是也其水源乃玉造河流分而入稻葉村是古稱緒絶橋也

藻塩草緒絶橋わうたうとふもそへたり白妙の

音かたいとくはそへたり中絶橋はしらの

うき名立る山鳥の葉ふまや秋の通ひち

伊勢の齋宮わとりよりまりりの不りて侍ける人に志乃ひてかよむなることをたほ

後拾遺戀

左京大夫道雅

やけもたこしめあてまもり先あせりけさせ給むてあれひにもうよはを成にけ絶はよみてむすひ川なさせ侍なる

みちれをのを絶の橋や是あらんよみ見よますと心まとを

讀此詞書而更詳往時公程之仁愛朝家之失政撰集之不正也道雅不足議焉聞私通而不罪却令人守之者仁厚之至也知荒淫而不糺却令彼長之者失政之甚也夫選集



采歌者須以公平正大而爲主以勸善懲惡  
爲戒矣如今舉淫奔不正之作而加之天  
子叡覽之書者記者之過失也夫考歷代之  
撰述多皆采私通密契之詠而公然載之萬  
世相傳之書而不息焉桑間濮上之樂自古  
甚爲監戒焉是以夫子告顏子以遠鄭聲矣  
後人豈可不警哉

續後撰戀四

定家

白玉の緒絶の橋の名もつらしみたれて落る  
袖のなみぬに

續千載戀二

院御製

憂事はあすの契もしる玉のをさけのはなは  
よ志やみみえし

同四

式部卿久明親王

逢事はとたけの橋乃はし柱又たちかへり戀  
わたるゝな

建保名所百首

新千載戀五

權中納言定家

琴れ音もあけけをはゝる契とて緒絶の橋の  
中も絶にき



同

民部卿資宣

逢事はやうてをたはれ橋柱憂名をたはるは  
てそ悲志死

同

爲氏

きよとたるその名も川を逢事乃なとくを  
とえれ橋を成るむ

新續古今戀四

藤原長秀

うたいたのをたはの橋やこの中おはれ志は  
かりれ契あるらん

延文二年百首歌橋戀

同

前大僧正資俊

なまへむ契乃布ともし玉の緒絶のそ志  
にわけて戀川

六百番歌合

同五

定家

人くろ緒とら乃橋ふ立りへりこの葉ふき  
散秋の通む路

名所百首歌合

順徳院御製

東路はをぬの橋もあるも乃をいかにくち  
ゆを袖とかは知る



家隆

逢事はぬるをさ乃みの夢路にてをたはれ橋  
も月そ更ゆく

建保名所百首

宗尊親王

山とり乃をたはれ橋にさるりけてなりき夜  
さぬる秋乃よの月  
山とりのをたへの橋にりりきりけはよき  
よわさる秋の月りり

此歌見源氏記者通失之乎

順徳院御製

いもせ山ふりき道をは尋來て緒たはれ橋よ  
ふみ迷むりり

建保百首

僧正行意

逢坂せげふこえとるとみちのくの緒絶の橋  
の末の志は浪

兵衛

たもひ乃みあつまよ志えてひを琴の緒絶の  
橋れ道やまをはん

定衡

東路や雲路へたてゝ聞しかとれたはれはし



は身よもありけり

俊成卿女

あふさりた忘れりよまにまのくは緒絶の  
はらの憂名はありを

知家

忘れるる憂身の爲の名も川らえ緒絶のはあ  
の秋の夕暮

康光

いきてこそ人をも間はめ玉の緒のやらの  
橋は憂名也けり

六百番

經家

思はれよ緒絶の橋と成ぬは猶人忘れす戀  
とさるりあ

定家

あるへあは緒絶乃橋あ行迷ひ又いまさあの  
物やおもはむ

建保三年名所百首緒絶橋

夫木集

正三位忠定卿

行末の緒絶のそあは聞も字しおもひの路に  
れくもあふれて



源氏藤袴卷けに人きゝをうち河なるやう  
あやと憚侍る河とあ年比乃むむ純いたさ  
もあれたらめ侍らぬはいと中々なる事れは  
くなんととゝすまよかに聞ゆあを給てま  
はゆくてよろゆとあこめとり

柏木

いもせ山ふりき道をは尋來く緒絶の橋にふ  
みまといひる  
よとらむるも人やりならまは

玉蔓

まといける道をはあらていもせ山たとく  
敷そと純もふと見し

歌枕裏書云源氏物語歌いもせ山ふかき心  
をあらすゑて緒絶の橋ふふ及迷哉彼妹背  
山に有は此橋歟まゝ當國有妹背山歟不審  
妹背山在紀伊國

齋田古館

在齋田村堤根肥後者居之

坂本古城

在坂本村坂本土佐者居館也



蟻袋壘

在蟻袋村熊谷玄蕃者居之

桑折城

在桑折村蜂森一曰相摸居館也是乃黑川安藝

叔父也安藝後稱月舟者也

伊場城

在伊場野村中目大學同氏兵庫居所也

千石古壘

在千石村往昔文學者居之

青塚城址

在古河西青塚村往昔青塚左衛門吉春館址也  
是亦大崎家臣也又塚目村有古塚東西三十間  
南北五十間  
相傳上代葬玉昭君地也

按昭君死蕃伶之遂葬於漢界號青塚杜甫詠  
懷古跡第三首曰一去紫臺連朔漠獨留青冢  
向黃昏青冢玉昭君墓也此地亦附會此義而  
強稱其名者乎

安國寺

在柏崎村源尊氏所建荒廢後曹洞宗者住而改  
常樂寺慶安中前大守忠宗君令松島寺雲居中



興焉此後柏庭悅岩者立一字號本源庵後來松  
島洞水法嗣通玄爲寺主山號興聖寺復安國寺  
漢合運曰光明帝曆應二年己卯每州立安國寺  
按是之時南北兩朝相分天下大亂兵革日急  
民疲人苦財盡力竭未及救世息兵之術却令  
每州有此制可謂不知先務之時也

### 松山城

近年茂庭氏居館也此地文治後賴朝卿經過之  
地也想往時通行道路也

東史曰文治五年八月廿一日泰衡兵拒官兵於

栗原三迫不克三浦介斬奧將若次郎同九郎大  
夫爲六郡朝光所獲賴朝收其兵而經松山路到  
栗原郡津久毛橋



玉造郡

四十五代聖武帝神龜五年四月丁丑陸奥國請  
新置白河軍團又改丹取軍團爲玉作軍團並許  
之

按如今丹取郡者不見後來合取之玉造郡中  
者如小田之於牡鹿四釜新田之於加美長岡  
之於栗原葛岡之於此郡是也

同天平九年四月戊午四百五十九人分配玉造  
等五柵

四十七代廢帝天平寶字四年正月丙寅記有出



羽榛正六位上玉作金弓者  
四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奧國玉造郡人外正七位上吉禰侯部念丸等七人賜姓下毛野俯見公大國造島足之所請也  
同寶龜十一年九月己未勅征東使省宜居多賀玉造等城能加防禦兼練戰術  
五十代桓武帝延曆八年六月庚辰征東將軍奏膽澤之地賊奴奧區方今大軍征討剪除村邑余黨伏竄殺畧人物又子波和我僻在深奧臣等遠欲薄伐漚運有難其從玉造塞至衣川營

同八月己亥玉造等一十ヶ郡與賊接居不可同等故延復年

八十二代後鳥羽帝文治五年八月十四日賴朝在多賀國府時聞泰衡等在玉造郡自多賀經黑川之玉造郡

同月廿日圍泰衡于同郡多賀波々城泰衡先逃亡

神名帳曰玉造郡三座並小溫泉神社 荒雄神社 溫泉石神社

玉造川 或稱玉造江



其河原出<sub>二</sub>于仙北自<sub>一</sub>中山出合鬼首川過鳴子大口岩手山中新田三本木松山經小野濱市入海也

大嘗會主基方玉造江を

夫木集

源重之

ひと川してよろ川をてぬを月おは底も見  
ねり玉川をり川

新勅撰戀一

小町

みちのくの玉川くり江は漕舟の音あそとて  
ね君を戀絶と

玉葉集

常盤井入道前太政大臣

とく露乃玉川くり江あはるてふ蘆の末葉  
のみた絶ておおもふ

歌枕

中納言高定

湊路あいと舟とめむ今宵わ絶玉川をり江に  
照月を見て

類聚

知家

蘆の葉のしらみに露をぬきとえて玉造江あ  
村雨をよる

文治六年五社百首



夫木集

俊成卿

月もすむ玉つくり江はあられふりおほりみ  
かゝる名は社有とせ

家集玉造川はりま藻塩草川類玉造川奥州  
但未定萬代くらを月

夫木川類

元輔

幾度の君の御代にはあふみかる玉川をり川  
をまむとすらん

薬田

未詳其地以歌意考之則言江畔之田乎

藻塩草田部 薬田奥州をすり田乃云々

藻塩

惠慶法師

をり田乃袂に給ふやめ草玉造江ふひと  
はなりなり

小黒崎

或曰隠隆磯取之松林隆崎之義

在名生定村去美豆小島以北五町餘郷人曰黒  
崎山翠松萬株馬鬣鬱々古人所謂髮絲蒼鬱籠  
烟露皮玉麟崎傲雪霜者也山下有石稱鱗口石  
藻塩草ををろ崎奥州のねをみあはふみしたぬま  
をくろのさきみつの



美豆小島

同所去三小黑崎西南四五町在三鍛冶澤東南玉造川中二北山皆戴三青松是乃一小黑崎也其下流有一洲々中有三高丘高二丈餘東西五六步南北八九間丘上有三蒼松三株河水縈三廻其下二翠色落陰急流潺々細石磷々白沙芳草殆非三凡境焉如三海島一兪故二佻方誤而用三海濱之狀者多若三太上皇家隆之歌可一視鄉黨亦致見小島于海畔二之情以稱三美豆小島一蓋美豆乃為見之訓也

藻鹽草美豆小島陸奥の岩木をくろにあさりすみ

る 田鶴そあくらし 波たつらしも

あつま歌れうちみち乃を歌

古今大歌所御歌

をくろさ死死多川の小島の人なはは都の川を  
にいさといはま志物と

奥義抄七云是は三小黑崎といふ所乃名也是  
は先くた死所な此は人あてあま志物と  
都へくしてのほりあましとよめる川とと  
は萬葉の裏とくきてよめり川くみもさる  
物といふ心あり人ありいかへは、多由川



しきさきとも田舎あとより土産をもてさ  
く人にとるをは此のひのつをかりとい  
ふころ也

横古今

順徳院御製

人なぬ岩木もさす恋なきは足川の小島  
のゆきの夕ぐれ

同秋中

太上天皇御製

小黒崎舟の小島にあさりする田鶴となま  
らし浪たはぬも

新後撰

光明峯寺入道前攝政太政大臣

さそふへきみ川の小島の人もあなむとりそ  
あへるみやあ戀ひ川

家隆

螢飛みつのことま乃たひ人はみやことこふ  
るこまやうをらん

中務卿宗尊親王

いさとたにいふひとあきてかすならぬみ川  
の小島の秋をふりに死

旅歌中

夫木

從二位家隆



ををろさけみ川の小島の夕暮にたかなる小  
舟行衛志は

寶字二年百首鳥鶴みちれく

夫木集

辨内侍

心ありて鳴よと所らる小黒崎みつ乃小島の  
田鶴のゆるこゑ

題をらす

同

よみ人志らけ

小黒崎みつの小島よ住とあそ都れはとに人  
もさそはえ

水尾歌合

同

俊頼朝臣

とくろさき澄きとらけの身と川をしとくる  
すりたふふはねとはみよ

信實朝臣

都にてをはいあゑん小黒崎み川の小島に  
川とそかくとも

謝東奥故人惠美豆松葉詩并引

小黒崎在玉造河之東河中、小島名曰美豆島、  
上有松數樹、霜根雪幹、古色蒼然、真千載之物



也是歲之夏故人掛冠之後遊歷到此手折一枝以贈我聞昔人遊賞此地恨其不與人共赴京洛矣據古論今所惠實深為愛惟多豈止感千里之祝歟

源君美

散髮當年擲玉簪名山到處得幽尋西來瑤水崑崙小東望滄洲方丈深杉葉秋飛洛陽思梅花春寄隴頭心神仙有藥稱難老何獨紅顏在華陰

分所寄松葉為奇以贈諸賀州太守及水戶故舊安積氏賞之

和下白石先生謝陸奧故人惠美豆小島松葉詩

老圃安覺

一枝蒼鬢寄微音為羨名區仔細尋遼海無塵千里靜蓬萊有路五雲深禱禱應感美人贈木柿還看好事心借問風流舊知己幾時乘興訪山陰

第六句用能因長柄橋柿事未審當否

池月湖 日之小黑崎沼

在小黑崎山下

家集沼 根蕪 蛙 歌枕

夫木

源俊賴朝臣

小黑崎沼のねぬかは照るたき日夕まゝに



かそつ鳴あり

同

光俊朝臣

とをろさきぬま乃根ぬかをる志<sub>レ</sub>此よに  
おなるおころ也なり

白練瀑

去美豆島西十餘町郷人稱白絲瀑布

小町塚

在新田村農家溝畔有古墓上有孤松是乃古之  
小野小町墳墓也匡房西行共言小町古墓在夜  
鳥郷カラスノト如今土人呼農家而稱夜鳥宅カラスノヤシキ據袖中鈔無

名抄愚見抄江次第則爲八十島今考其地則在  
羽州未詳何地

袖中抄第八あなめく

秋<sub>ク</sub>せのふくにつけてもあなめくをの  
とはいはしす<sub>ク</sub>生けり

顯昭云あなめく<sub>ク</sub>とあなめい<sub>ク</sub>と云  
也凡此歌のくろは江記云在五中將爲嫁件  
后<sub>ニ</sub>出家相接其後爲生髮到陸奥留八十島  
求<sub>テ</sub>小野小町戸<sub>ニ</sub>夜宿件島終夜有聲曰秋風之吹  
仁津氣天毛阿那目阿那目云後朝求之體目



中有野蕨薇在中將涕泣曰小野止波不成簿出  
計里即歛葬云々據此說則八十島與州也  
童蒙抄云此歌小野小町集今本無昔野中  
を行人あり風の音のやうめて此歌を詠る  
聲はこゝ立よりて尋ねたるとるに詠るける  
也彼のすくきをとりすてその頭をよき所  
を死てあへりぬ其夜乃夢に我は是昔を小野  
小町といはるる者也嬉を思を蒙りぬると  
いへりさて此歌と後ふ彼集に入らるとそ  
私云此兩説乃心相違江記は獨陸奥留八十島

求小町尸童蒙抄には行野中風聲吟ふて夢想  
に示小町江記は連歌なり終夜有聲唱上句後  
朝に業平付下句童蒙抄と一首聞風聲江記に  
は髑髏に有野蕨薇童蒙抄は薄生出たりと  
云

古今目錄云小野小町者出羽國司女也云々數  
十年在京好色也然而歸本國死去故屍在八十  
島歟小野者姓歟住所歟古今有小野姊其歌云  
時過てかれゆを小野乃あさちには今はれ  
ゆひを絶すもゆける



私云此歌有<sub>二</sub>小野之詞<sub>一</sub>舉<sub>二</sub>我名<sub>一</sub>只又自出來歟  
八雲御抄に清輔云出羽ふ有と云々普通には  
但八十島也

藻擡草五

幾度か霜は置<sub>二</sub>む菊<sub>一</sub>此花八十島<sub>二</sub>とて<sub>一</sub>  
川<sub>二</sub>ろむ<sub>一</sub>ふ<sub>二</sub>たり<sub>一</sub>

無名抄を引て業平奥州へ下向乃時みちの國  
八十島と云所にやとりければ野中ふ歌の上  
比句と詠ずること有

あきりせのふをには分てもあまめく

と聞ゆ其あたり尋給ふに人なを死人の頭一  
川有を此より生たる薄の風にみ<sub>二</sub>る<sub>一</sub>音乃  
く聞<sub>二</sub>た<sub>一</sub>也<sub>二</sub>叔<sub>一</sub>あり乃人<sub>二</sub>間<sub>一</sub>給へは小  
野小町のせ<sub>二</sub>く<sub>一</sub>せう<sub>二</sub>川<sub>一</sub>又<sub>二</sub>所<sub>一</sub>也とこふそ  
乃時歌乃末と川<sub>二</sub>給<sub>一</sub>へり

を<sub>二</sub>と<sub>一</sub>といは<sub>二</sub>あ<sub>一</sub>す<sub>二</sub>生<sub>一</sub>けり  
此説亦八  
十島爲<sub>二</sub>奥<sub>一</sub>  
州

鴨長明無名抄云小野小町事或人い<sub>二</sub>は<sub>一</sub>業平  
の朝臣二條の後のいまたた<sub>二</sub>人<sub>一</sub>に<sub>二</sub>は<sub>一</sub>えま  
あける時<sub>二</sub>あ<sub>一</sub>とりてゆきけるをせうと達



ふせり返されぬるよあいへり此事又日本記  
 比貳にありことさまはりの物語にいへるこ  
 とをなるにとりて字はい返あはる時せうを  
 達せの憤やすめかたくて業平朝臣の髻をき  
 りてはりあかあれと誰爲にもよからぬ事あ  
 りは人もいふ心むと川にのみ思ひて過は  
 るよ業平朝臣髪生さんとく籠るたりける程  
 に歌枕共見んとて數寄に事よ移て東のりま  
 へ行けり陸奥國に到りてやそしまをいふ所  
 にやとりたりはる夜野乃中よ歌の上の句と

詠する聲有其詞ふいはを

あはれおせのよくおゆけてもあなめく  
 と云怪しく覺ゆて聲を尋つゝ是を求るに更  
 よ人なまゝとく死人乃頭ひとつ有朝よ猶是を  
 みるにうのとくろのそのか忘らの目のあな  
 より薄なん一本生出たりはるそ乃薄の風に  
 かひを音のよをきこゆればあやまを覺ゆ  
 てあたりの人に此事をとよ或人れ語るいは  
 を小野小町此國よをとりて此所にして命終  
 りあはり即りの頭是也と云爰に業平哀に悲



志く覺ゆれば涙をねさへて下れ句をゆけり

そのとはいはしすくれおひあり

と抱はれくるその野とは玉造乃小野といむ

とると抱侍る玉造の小町を小野小町とは同

人の何れぬものうと人々覺ゆかなき事お申

て何れそむ侍ると人のうたり侍る也

古事談に業平朝臣盜二條后官仕將云之間兄

弟達昭宣追至奪返之時切業平之本鳥云々仍

生髮之程稱見歌枕發向關東見伊勢宿奥州八

物語

十島之夜野中有詠和歌上句之聲其詞曰秋風

之每吹穴目々々就音求之無人只有一之觸體

明旦猶見之件觸體自穴薄生出よりなり毎風

吹薄のフシコトかひく音如此聞ゆり成奇怪思之間

或者云小野小町於此所遊去件觸體也云々爰

業平垂哀憐付下句云小野をといはし薄生ぬ

り云々件所を小野といひけり此事見日本記

式

兼好徒然草小野の小町事極めてさたりあ

らす衰へたるさまは玉造といふ文に見ゆた



り此文清行ありけりといふ説ありと高野の  
大師の御作の目錄より此り大師と承和れ始  
みかくき給へり小町如盛なるものと其後乃事  
にや猶覺束かじ

百人一首作者傳曰小野小町出羽郡司小野  
當澄女或曰出羽郡司小野良實女或爲常澄  
女三光院爲當澄女爲是仁明帝朝承和中人  
也拾芥抄説亦相同

按三代實錄曰業平故四品阿保親王第五  
子行平弟也體貌間麗放縱不拘略無才學

善作和歌履歷亦不卑今考其爲人好色淫  
行往時贈太政大臣長良女爲處女時密通  
欲勾引而出去焉國經伊尹蚤知捕之獲其  
鬢髮而於之然此人亦王孫也須別有所置  
矣何其甚哉業平亦包羞忍耻而此時已東  
行何其荒淫哉高子後爲清和帝后妃至寬  
平八年而復與僧善祐通停后位然則高子  
亦甚失婦德中葺之事不可説之人也仍舉  
此以備業平東行之參考云

磐手城



此地舊名曰岩手澤。大崎家臣氏家彈正者居館也。天正十九年東照神君討葛西大崎黨而歸路。修荒廢築此館。使黃門君居于此。還于江都已十二年。後慶長七年壬寅黃門君遷于宮城郡仙臺令第八子三河守宗泰居于此城。自是相繼至今。有寺號寶相寺。神君往昔次軍之地也。登時之飲器今猶存焉。又寺前有長松。氏家彈正塚上樹也。後人稱磐手山。號岩手關。尿前擬岩手岡。城上而爲歌林名跡。然古歌所詠地在南部領岩手郡好事之徒所以聊擬其地而稱之也。

### 名生城

在名生村。往昔氏家兵內者居館也。後大崎義隆朝臣遷此城。天正年中爲大閣亡城。遂屠。當年焦米焚穀。今猶存。

### 一栗館

在下。一栗村。大崎家臣一栗兵部居館也。

### 葛岡城

在葛岡村。葛西監物居館也。文治後畠山重忠居于此城。東史曰。文治五年九月廿日賜葛岡郡于畠山次郎重忠者。乃此城也。



按葛岡舊郡名後分屬村落其佗往昔稱一郡者沒村邑地維多若新田色麻今作釜長岡階上今作波小田之於賀美栗原本吉牡鹿此地亦其一也

多賀波々城

在同村錦戶太郎國衡支城也

東史曰文治五年八月廿日賴朝赴玉造郡而圍

泰衡于多賀波々城先逃亡殘兵乃降自是過于

葛岡郡而赴于平泉

新井田城

在新井田村大崎家臣新井田氏世居之爾後義隆侍童新井田刑部者妬寵而作亂

新井田字或作新田而訓之丹井多故誤以為

上野新田同訓也不辨其訓之異也

莊司館

在上宮村近于小黒崎佐藤莊司假館也

照井城

在下野目村秀衡家臣照井太郎高直居館也

啼兒温泉 鄉俗作鳴子字非也須考之事實

在啼兒村自岩畔出克治瘡疾其下亦有温泉此



地也相傳往昔義經北行夫人關胎于龜毀坂仍  
辨慶養之笈中來於茲地始出呱呱聲故後人號  
啼兒溫泉在其地神名帳所謂溫泉神社是也

荒雄神社

稱荒雄嶽山中有溫泉見神名帳

石神社

在大口村其地川度多調比河波有溫泉所謂溫泉石

神社是也

抑池

在三町目村上古有湖水池中有巨蛇年々以美

婦供犧牲有一女子丁其選女子聰慧臨池畔而  
說蛇蝎曰妾如今當其人奚敢逃其死但妾有志  
願請遂得之則足以甘死矣巨蛇有點頭色女子  
取數千之空瓢及金針示之曰令瓢子沈之海底  
金針浮之池上如遂志願則投身乎汝巨蛇領之  
引去然針之沈瓢之浮無奈之何仍起濤翻浪屢  
欲浮沈之於是息絕術盡終至仆也女子然無恙  
而歸其家父母昆弟大悅之瘞死蛇于池畔立寺  
祭之女子以克禁其妄而停其犧牲後人曰之抑  
池其畔有一丘以下彼巨蛇首其丘而死稱之首丘



其湖如今爲野田池水僅存其水雖炎旱不涸鄉俗說曰地下有水脉有大鱧潛行故其水往來而不絕仍號之下釜

抑關

同所有溝洫是乃玉造分流曰之蛟田其橋邊曰抑關過莊嚴寺門前而之栗原之道路也相傳源賴義康平中東征次軍之地也

右兩區在伊達郡而同名有古歌載其下

天王寺

在上目村山號興國山文武帝大寶二年聖德太

子遷攝州天王寺者也有古墳相傳物部守屋墓也想夫後人依建天王寺而是亦設于茲乎傍有江浦草橋事實見栗原郡



賀美郡

桓武紀作加美今從續日本紀延喜

四十五代聖武帝天保九年四月十一日將軍東人廻至多賀棚自導新開通道摠一百六十里或剋石伐樹或填澗疏亭從賀美郡至出羽國最上郡玉野事詳聖武紀

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奧賀美郡人文部國益賜姓阿部陸奧臣外正七位下吉侯部大成九人上毛野名取朝臣是大國造道島宿禰島足之所請也

同寶龜元年四月癸巳朔陸奧國黑川賀美等言



日除俘囚之名輪調庸之貢許之

五十年代桓武帝延曆八年八月己亥加美郡已下  
十郡與賊接居不可同等故延復年

神名帳曰賀美郡二座並小 飯豐神社 賀美  
石神社

### 鹿島社

在四日市村寬永中忠宗君再造舊社未詳何代  
所經始

### 香取神社

在四窰村有寺號香取山窰印寺平城帝大同年

### 中所建

鄉人說曰分宮城郡鹽釜四口而埋之仍得四  
窰地名豈夫然耶是古之色麻地鄉黨誤其文  
字者且得分神窰而至此地哉是皆妄說之甚  
者也

### 宮崎古城

在宮崎村大崎家臣宮崎一作民部者居館天正  
中黃門君依大閣命攻之城兵守而不降屢攻遂  
城陷秀吉公賜感書而賞其功績城畔有幽泉可  
以掬手細石磷々時有雨水溢而不過馬腹鄉人



以為奇泉焉

按此役乃天正十九年葛西大崎故家遺族舊臣古從苦木村伊勢守父子虐政暴惡含怨發憤各立黨率類以佐沼城畔木村父子逃亡於是大閣秀吉公命神君及黃門君蒲生侯征之此未處々多其役也

鳥島城

在鳥島村北鄉右馬允居館也天正十九年大崎徒黨據佐沼城右馬亦至此黃門君攻之急八月五日城陷虜右馬允一栗兵九郎斬之且戮一栗

放牛兵九郎祖北鄉道林右馬允父等三千餘人

按玉造郡一栗城主曰一栗兵部一氏一號想放牛兵九郎亦其家族據佐沼反者乎

上館壘

在往生寺村大崎家臣今野伯耆者居之

小野田城

同村石川長門者居館也

石神社

在小野田本鄉有巨石長五尺濶四尺方三間神名帳所謂飯豐神社是也鄉人誤為飯鳥屋神社



石神社

在谷地森村神名帳賀美石神社是也

藥來山

跨芋澤味袋鹿原三村山勢突兀山上有善遊堂往時有富家經始此堂及落成而鄉黨相賀曰今斯人欲建此堂祈之而俾一鄉無疾病也猶令靈藥携來于此鄉而救衆人矣庶幾自是鄉里因茲而永無疾病焉仍名曰藥來山也或曰古昔八幡太郎義家朝臣討夷之日放矢如雨夷賊來之防其危恰若嚼盡祭飯也其徒在山下避箭如此故

俗呼曰矢嘯山々下七瀑布其大者曰仙龍瀑布矣尤奇觀也 後說甚拙

旭日山館

在小野田村大崎家臣小野田玄蕃居城也

高根城

在高根村笠原内記居之

味袋館

在味袋村是亦大崎臣加藤清右衛門居所也

枇杷壘

在柳澤村大崎臣八野木澤備前居之 八野木澤疑誤柳澤



者矣鄉音不正蓋至茲耳

谷地森館

在谷地森村谷地森主膳居之兩主番氏笠原

米泉城

在米泉村米泉伊勢居之是亦大崎家臣也

中新田城

在中新田村大崎義隆朝臣居于此自是移名生

城後家臣南條下總者居之或曰氏家彈正也

四竈城

在四竈村四竈尾張居館也或曰內崎中務者居

之共大崎家臣也



栗原郡

按分一郡于四部而有二二三迫號鄉黨嘗言一迫古號姬松莊屬三十二村二迫稱尾松莊屬十六村三迫稱高松莊屬二十九村外二十三村稱之栗原莊

四十八代稱德帝神護景雲元年十月乙巳置陸奧國栗原郡本是伊治城也

神名帳曰栗原郡七座大一座 小六座表刀神社

志波姬神社大神雄銳神社 駒形根神社

和我神社 香取御子神社 遠流志別石神社



志波姬神社

去高泉驛北三町餘有一泓泉傍有叢祠是古之志波姬神社也有旱魃則鄉俗禱雨而有應仍稱之清泉明神

伊治城

記郡中其地不詳何所也稱德帝神護景雲元年十月辛卯勅見陸奧國所奏即知伊治城作了自始至畢不滿三旬朕甚嘉焉宜加酬賞式慰匪窮其從四位下田中朝臣多太麻呂授正四位下石川朝臣名足大伴宿禰益

立正五位上從五位下上毛野朝臣稻人大野朝臣石本從五位下外從五位下道島宿禰三山首建斯謀修成築造今美其功特賜從五位上又外從五位下吉禰侯部真麻呂徇國爭先遂令馴服壯彼如歸進賜外正五位下自餘諸軍々毅已上及諸國軍士蝦夷俘囚等臨事有効應叙位者鎮守將軍並宜隨勞簡定等第奏聞

同年十二月丙辰勅陸奧國管內及佗國百姓樂住伊治桃生者宜任情願隨到安置依法給復上同三年二月丙辰勅陸奧國桃生伊治二城營造



已畢厥土沃壤其毛豐饒宜令坂東八个國各募部下百姓如有情好農桑就彼地利者則任願移徒隨便安置法外優復令民示遷

同年夏六月丁未淨石百姓二千五百餘人置陸

奧國伊治村按至此所直稱伊治村爲地名可此見又前條稱坂東八个國始見于此

四十九代光仁帝寶龜八年十二月辛卯初陸奧鎮守將軍紀朝臣廣繼言志波村賊蟻結肆毒出羽國軍與之相戰敗退是以近江介從五位上佐伯宿禰久良麻呂爲鎮守權副將軍令鎮出羽廣

繼授從四位下勳等佐伯久良麻呂並外從五位下勳百濟王俊哲勳五等自餘有差

同九年六月庚子賜征戰有功者二千二百六十七人爵伊治公咎麻呂授外從五位下自餘有差同十一年二月丁酉陸奧國言欲取船路伐撥道賊比年甚寒其河已凍不得通船令賊來犯故先可塞其寇道仍須差發軍士三千人取三四月雪消雨水汎濫之時直進賊地固造覺驚城於是下勅曰海道漸遠來犯無便山賊居近伺隙來犯遂不伐撥其勢更强宜造覺驚城得得膽澤之地兩



國息無大於斯

丙午陸奧國言去正月廿六日賊入長岡燒百姓家官軍追討彼是相殺若今不早攻伐恐來犯不止請三月中旬發兵討賊並遣覺警城置兵鎮戎勅曰夫狼子野心不顧恩義敢恃險阻屢犯邊境兵雖凶器事不措止已發三千兵以刈遺孽以滅餘燼凡軍機動靜以便宜隨事

三月丁亥陸奧國上治郡大外從五位下伊治公皆麻呂反率徒衆殺按察使參議從五位下紀朝臣廣繼於伊治城伊治麻呂本是夷俘之種也初

緣事有嫌向皆麻呂匿怨陽媚事之廣繼信用殊不介意又牡鹿郡大領道島大楯每凌侮皆麻呂以夷俘遇焉皆麻呂深禦之時廣繼建議遣覺警城以遠戎候因率俘軍入大楯皆麻呂並從至是皆麻呂自爲內應唱誘俘軍變而先殺大楯率衆圍廣繼攻而害之獨唯介大伴宿禰真綱開圍一角而出獲送多賀城久年國司治所兵器糧畜不可勝計城下百姓競入欲保城中而介真綱椽石川淨足潛出後門而走百姓遂無所緣一時散走後數日賊徒乃至爭取府庫之物盡重而走其所



遺者於火而燒焉繼一作純

按皆麻呂先是久浴皇化賜恩澤如今反王命而面殺公官事見前八年可謂暴虛之甚者也九年記大楯亦不言無罪焉真綱淨足不討仇而走可謂怯懦之甚者也豈不耻之哉

五十代延曆十一年正月丙寅陸奧國言斯波村夷膽澤公阿奴志包等遣使請曰己等思歸王化何日忘之而為伊治村俘等所遮無由自達願制彼遮鬪永開降路即為示朝恩賜物放還夷狄之性虛言不實常稱歸服唯利是求自今以後有夷

使者勿加常賜

十五年十月戊申相摸武藏上總常陸上野下野出羽越後等國民九千人遷置陸奧國伊治城新城館

在高泉驛口樵木山傍有古石墳二基題曰元弘四年甲戌所立也不詳為何人千枝湖

在小野村湖中有島安辨才天謂天女島是湖水所謂大崎沼者是也如今水已涸湖畔有古館是乃大崎義隆朝臣故墟也或曰大崎沼今新田沼



也

花島山 翠生孤島中流見白寫層巒四望開

在同村乃大崎沼畔有一青山往昔多花木所謂  
綠淨春深如染衣有古歌鄉黨相誦來

よ其人志らば

みちのくの花島やまみ陰落く木末み魚のの  
ほるとそえゆ

按此歌與古詩所謂綠樹陰沈魚上樹者暗合

朽樹橋

同村圯橋也或曰在樋口村

戀歌

風雅五

藤原朝定

あふ事はち木の橋のさゆかにかよふは  
あり此道たにもあし

河内

みち乃く乃朽木の橋も中絶てふみよ今を  
あよはさりたり

家隆朝臣

谷川のくち木のはしも埋木の人にしはたぬ  
道や絶なん



粧奩泉

同村相傳往昔佐用姬者趣膽澤時設靚妝投其具於此去或曰移容貌于此幽泉地也

簀子橋

在內野崎村近于荒屋驛是地亦舊跡也

清瀧泉

在清瀧村有小瀑布往古人賞來之地也

大武峯

在佐沼莊南方村此地往昔廢賊首大武丸充之地也上建大悲閣雲慶作大同中田村麻呂所置

也有寺號大武山天王寺

佐沼城

在北方村往時秀衡家臣輝井太郎高直居于此城

佐沼湖

同村有小湖深潭不可測也是亦舊地也  
一迫

四分栗原以一二三而區處焉其一也築館照越  
萩原八澤大田沼崎梅崎鳩岡堀口八樟刈敷留  
場成田清泉等皆屬于此



東史曰文治六年二月十一日泰衡舊臣大河次郎兼任與征東軍監千葉新介戰于栗原一迫兼任盡敗走取殘兵五百餘而屯于平泉官兵進襲衣河兼任敗絕北上而至于素都瀆糟部據鳥島舞梯為上總前司敗自是經華山千福山本踰山潛居于栗原等

杉峯善遊堂

在築館驛口廢帝寶字四年建之其像傳教作也有寺號醫王山叢林寺

荒湯溫泉

在鬼丸村往古塵山鬼丸于此山仍稱其地名側有石其一曰老婆石其一曰黃犬石或曰此地乃荒雄地也荒雄荒湯訓同後人誤其字者也

不動閣

在花山村運慶作堂宇飛驒匠所建有寺號金峯山花山寺

貞任古壘

在川口村往時貞任所據之地也有瀑布號牛潭瀑布

坂本館



在長崎村相傳秀衡家臣長崎四郎故壘也  
白坂多門天

在上宮野村傳教作也有寺號萬德山興福寺  
安寧天皇御陵

在同村以有御陵而稱其地于宮野焉

按安寧帝人玉第三世天子諱磯城津玉手看  
綏靖帝太子母曰五十餘依媛命事代主神之  
小女也治世三十八年五十七歲崩葬之畝傍  
山南御陰井上陵無東遊事實有何據而傳後  
世而至今哉尤可怪

### 保呂羽社

在真坂驛後相傳武烈帝以性行暴惡而配于此  
地崩御後建祠以祀之

按武烈帝事載詳于國史或剖孕婦腹視其胎  
築石室而將避火雨解摺甲使掘薯蕷拔頭髮  
使上樹倒木而殺之伏塘械刺殺或射人于樹  
令女牽馬遊化之類暴惡不可枚舉焉然無配  
流之事是亦據何而附會妄說乎  
赤松館

在島體村佐藤莊司長子次信舊居也館下有寺



號長水山吉祥寺有佛像安阿彌作也有古墳記  
日貞治二年二月三日貞治九十九後光嚴帝十  
二年癸卯也  
二迫

文字鶯澤稻宅袋村櫻田傍兒黑澤八幡富村栗  
原姊齒梨崎城生綿丸菱沼真根牛泉澤凡十七  
村曰之二迫

### 八幡神社

在八幡村康平中義家所建也有寺號小治山源  
東寺相傳賴義朝臣次軍之地也社中藏甲冑二  
襲義家東征之時奉納鍔鎧也其一則六十二行

冑前三段垂條上竅菊花蔓藻錫五段蔽耳廣表  
額飾一尺一寸上形三寸五分下減五分坐金菊  
額下濶八寸六分長二寸其下腹板一尺下散板  
九寸菱縫板苞以革共八下枹檀板菊藻紺綿緋  
穿割札其二則冑七寸五分圍六寸二分錫五段  
踈綴胸板八寸其下亦同下散八寸五分八行一  
段各異其色紅紺綠紺紫綠碧腰佩一尺六寸長  
八尺五寸社中舊物也  
鰐口一器是亦舊物也有銘曰小治山源東寺延  
慶四年壬亥正月五日大旦那大麥生藤內次郎



國正

按延慶四年壬亥九十四代花園帝應長元年辛亥也壬辛字誤也

鏹字俗間用之胃衿考字書無此字鏹字義近之於加切音鴉鏹鍛頸鎖誤此字乎大麥生姓氏乎不詳何人也

鳥合神

在傍兒澤村相傳往昔由理若龍鷹綠丸產于此地後人哀爲主溺死建祠以祭之

秋法社

在鷺澤村天喜中年五賴義東征之時建熊野三社于山上以祭之秋七月落成焉於是始備禮奠定祭法仍以此字爲社號焉言取義于肅殺之事也按歐陽永叔秋聲賦有言曰夫秋刑官也於時爲陰又兵象也於行爲金是謂天地之義氣常以肅殺而爲心天之於物春生秋實故其在樂也商聲主西方之音夷則爲七月之律商傷也物既老而悲傷夷戮也物過盛而當殺如今賴義建社而祈平安與此義暗合矣然則賴義朝臣之於戰陣自然叶此理者歟宜哉所稱古今



之英雄耶

又社中藏舊物其一古鞍其二曰假面其三曰鉢  
賴義古館

同所鄉人謂之秋法館賴義之故墟也

節女石墳

同村在河畔高七尺濶四尺往昔玉造郡磯田村  
有<sub>二</sub>小林修理者其家赤貧殊甚以其幼女難養育  
與<sub>之</sub>鄉人流離終售身倡家歲餘修理入青樓而  
戲其女々知其家君而辭之後耻之投于河水而  
死鄉人哀悼其志立石以吊之古墳今猶存有寺

號鶯澤山金剛寺往昔修理所建也

八所權現

在稻敷村平形地有寺號春日山高松寺有古鰐  
口二器其一銘曰善喜二年三月日其二銘曰寄  
附鰐口一器於陸奧長岡郡荒谷鄉安養寺時寬  
正三年壬午二月廿四日願主常德

按善喜年號不見用喜字于下者七十年代後冷  
泉帝天喜外無有之寬正百三代後花園帝三  
十四年也依此銘而曾知此地乃古之長岡郡  
也然則此時未收村落猶立郡名也高松寺後



稱安養寺乎又其寺在荒谷而適以此器而藏  
此寺者乎

姊齒松

一作阿禮葉今從夫木集  
松葉集作姊葉藻盤草

去澤邊東十二町餘在梨崎村有長松樹是也古

松乃四十餘年前枯槁其松五葉後人繼而所植新松

也古老相傳是乃筑紫肥前產松浦佐用姬者之

姊某墓上松也或曰小野小町姊也往昔有寺號

松語山龕藏寺是乃妹子爲亡姊所建精舍也

佐用姬事見伊澤部藻盤草  
あねはの松同事歟

新松以南有一樹鄉老某塚上松也有誤新松

者尤可辨別焉

むらゑおとあちれ國にすゝろにゆき

いさりよりそこあるれんを京の人は

先はあかあやおほわんせちになもへ

る心あん有りはるさてかのおんな

中々お戀にまなすをまはくにそあるへりり

はる玉の緒はかり

歌さへそひなひよりけるさそりにあはれ

とや思むけんいきてねよけり夜ふりを出

あはれは



夜もあけはれつゝはめあてくらげ乃また  
さに鳴て移あせやり川へ

といへるよを空こ京へなんまかるとて

伊勢物語第十四

くりとあや河ねはの松乃人あらは都の川と  
にいさといはましと

といへりなれはよろおほひてれもひけあ

志とそいひおりける

按前後二首及終篇詞皆所述方言而可下以  
視往時郷語之實矣又審往時之人雖里婦

之賤亦能做風俗詠和歌以述其情於是始

知遺國風于此歌而王化之及邊塞在茲也

第一首之意與明沈明臣官怨詩綠滿南園

桑葉肥風光欲盡柳花飛妾生不及吳蠶死

留得春絲上袞衣者略相似能寫得情實也

みちの冬ふあねはの松

夫木

祐舉

のくはかり年月もりぬる我よりも姉は乃松  
ち老ぬらんかこ

長明



ふる郷の人よわたらむ栗原や姉羽の松のう  
をひすの聲

千五百番歌合 正三位秀能朝臣

栗原の姉はの松とさむむくも都をい川と志  
らぬ旅かあ

姉齒橋

みちの國よくあねはのはしを夫木集橋類

能因法師

くちぬらんあねはの橋もあさかく浦かせ  
ふきて寒き濱邊に

按能因親見之人也今與此地異也想夫別  
有稱姉羽橋者乎考下一首則自稱松于此  
地者無可疑然至詠水濱者則不合焉如何

光景古館

松樹以南有古壘泰衡家臣姉齒平次光景之故  
墟也館下水田往古稱東奥道者也

摩腰石

去松下東南十二三間有巨石上有紋理如布往  
昔義經經過此地聊憩于石上而伸旅鬱之地也  
龕藏寺址



龜毀坂以西三十間許有寺址古之松語山龜藏寺址往時葬佐用姬姊之地也後改字松護山岩藏寺

黃雀池

新松以東一町餘林中有小池長二三間濶五六尺義經東徑汲池水而研墨作家書之地也

八幡叢祠

松樹西北在梨崎村荒廢已久姊羽古松摧爲三斷鄉人納一段于社中以爲後証焉今猶存

栗原寺

在菱沼村有寺號上品寺是乃古之栗原寺也

東史曰文治六年春大河兼任潛居于栗原寺着錦脛巾佩金釧刀鄉人怪之三月十日樵夫數十人起圍其寺以斧斤殺之

鄭子臧出奔宋好聚鷓冠鄭伯聞而惡之使盜殺之君子曰服之不衷身之災也詩曰彼己之子不稱其服子臧之服不稱也夫兼任身爲轉客猶着錦佩金宜哉值樵夫之害也

無音瀑布

在大河口畔昔川地亦蓋其河流也歟



夫木集

能因法師

いりまゑていひはええけむことのはそ昔川  
にそをふへかりぬる

此歌はあちのくににくさりけるま栗原  
乃郡にそ控こにゐるものは音か志瀧  
に侍り又河をはむり志川といひ侍ると  
いへはよめると云々

六帖音なしの瀧陸奥或山城或紀伊

正三位知家卿

落瀧津水れ白玉ひへげとも君は音かとの死

へ控ふりぬる

建長七年顯朝卿家千首歌

大宮院中納言

音な志の瀧の白糸あゑとせてもゆるはたる  
れかみたおや見る

戀歌

西圓法師

その山のうへよりたつ瀧の名れ音な志に  
のみぬるへ控てあ

能因法師

都人けりぬはあきと音な志の瀧とはあとら



いひはしめむ

此歌はくり原の郡あてそこあものせ  
これは音あとの瀧に侍り又川は昔河を  
いむ侍るといへとよめるとぞ

題あらは  
よみ人しは

いりにあていりによらんをの山のうへよ  
り落るをとなとの瀧

按此歌并西園詠考則小野山乃其山頭也

三迫

岩崎沼倉松倉中野鳥津猿飛來大原木里谷平

形深谷藤渡戸普賢堂赤兒末野片間合小堤有  
壁小迫金成有賀御田鳥武鎗石越澤邊大林畑  
村福岡若柳石崎凡二十九村曰之三迫

東史曰文治五年秋泰衡令若九郎大夫余平六  
屯栗原三迫黑岩口一野邊拒幕下賴朝

同八月二十一日三浦介斬泰衡將若九郎同九  
郎大夫爲所六郎朝光所虜賴朝收其兵而經志  
田郡松山路而到津久毛橋

黑岩口城

在岩崎村是乃古之所謂黑岩口城是也今稱之



岩崎城事見前條

津久毛橋鄉黨稱之江浦藻橋今從東史

金成驛五町餘大悲閣下有水流三迫河流架一土橋津久毛橋是也橋西平形村以東岩崎村跨南北上有古館址立石刻銘記曰泰衡之墓高四尺五寸石面上有梵字下書承保六年二月廿日左記曰密方敬白橋畔是文治古戰場也城湟殊深士卒憂之投江浦藻陷而攻城々遂陷仍名江浦藻橋

按承保六年白河帝承曆三年己未也考之承

保四年丁巳改元于承曆而無六年蓋東奧邊陸道路已隔未解改元推記其年數者也先文治五年己百有一年非泰衡墓也審矣蓋康平中戰死者之墓乎然考國史貞任乃後冷泉帝康平五年壬寅伏誅先承曆三年己十有八年後人立石而吊之乎幸以有津久毛橋之役鄉俗不考時世妄附會而為泰衡墓者乎且江浦藻乃海畔者豈生于斯地哉蓋岩畔野草莽々離々以相似江浦藻而假其名者也

東史日文治五年八月二十日賴朝過津久毛橋



時梶原平次景高獻和歌以賀之曰

みちれく此勢はみちのよりの橋はあま  
ておん安衡か首

或曰上句乃賴朝卿作景高慶下句

連架橋

在江浦草橋西往年河流廣濶故橋梁不足架東  
西相繼以用名故連架橋今水涸流細

信樂寺

在津久毛橋北號江浦藻山信樂寺今荒廢而古  
址猶存焉

十三壇

連架橋北二十四五間在古館址上設土壇十三  
堆自北至南相連不詳設之義或曰此地往昔之  
古戰場而塵戰死者之塋也

守夜壇

信樂寺址北有一古壇泰衡營陣之時士卒守夜  
之處

大原木十三壇

在大原木村山上阻繼橋以南十六町餘自北及  
南相並蓋是亦戰死之古墳乎



古幽泉

出津久毛橋古館下城湟之水源也

初崎大悲閣

在岩崎村有寺號音羽山清水寺相傳惡七兵衛師末者子彌兵衛師門擬京師大悲閣是乃景清後裔世信仲觀音旋及其後孫也或曰彌平兵衛師門者也

重家館

在小堤村有寺號尼山喜泉寺是乃鈴木三郎所據古墟也

義經墳墓

在沼倉村義經自盡後沼倉小次郎高次者葬之此地以立其陵墓此地乃高次古館址在上頭高山稱之辨慶オイカミ往昔武藏坊經歷之地也

彌陀堂

同村佛軀背後記曰應永二年所建也藏義經馬具如今纔餘隻鐙又有古笈辨慶所負舊物也納錦襪袈裟傍有故礎往時多堂社置八幡天神愛宕藥師觀音遺址也

雌雄瀑布

同村山中雄瀑布直下十五丈餘畢由所謂洞門



千丈掛飛流玉碎珠聯冷噴秋今古不知誰捲得  
綠蘿爲帶月爲釣者宛然在目前雌瀑從焉

白象峯普賢堂

在普賢堂村後花園帝永寧中平低重所建有寺  
號白象山洞雲寺傍有熊野叢祠鱗口記銘曰永  
寧十二年四月廿二日平低重納之

舞童墳

在紅袴村相傳往時秀衡好歌舞於是選舞童數  
十輩常舞歌曲於庭以爲樂焉有一少年號春風  
容貌閑麗技亦秀出于群兒歌歇行雲舞飄紅袖

衆人移心于此兒無致顧盼于佗者仍群童惡之  
潛令人殺之以廛于此其兒好紅裳故後人稱之  
紅袴村

小迫大悲閣

在蒜香鄉小迫村號小迫山正大寺應永二年八月十日土佐  
守繼長者有上梁文五十一代平城帝大建大悲  
同年中田村丸所建號高峯山正大寺

閣有緣起全篇俚不足取之故略記曰  
正大寺坂上將軍俊宗所創立也分註曰倫重俊

世相次共任桓武帝御宇勢州有妖魅潛竄于鈴  
征夷將軍

鹿山中黨類多奪人愛子寵姬于帝城以充庖廚



鐵城石門不能禦之猛將勇士無當之者謂之大  
武九令將軍俊宗征之俊宗率官兵到鈴鹿劍峯  
聳天層巒吐雲嶮岩邃洞不詳何處是鬼窟或白  
晝忽暗闇夜頓曉或雷電雨雹乍發乍息非常怪  
異不可勝言三軍戰栗徒躊躇耳俊宗知不可以  
人爲而征即潛心以懇禱于千手薩埵一宵兀坐  
非夢非覺見神女于恍惚之間天衣峨冠從容曰  
將軍奉勅來不亦好乎但妖魅容易不可獲有一  
奇計以示之子彼幸好飲今夜當置酒以出之乘  
其酣醉子謀之言訖去開戶視之不知其處俊宗

約期率精兵舍枚把炬而入山中溪間山路不迷  
直到鬼窟果群鬼盡醉臥引勁弩接利兵殺之唯  
大武九脫身走於磐瀨郡千丈嶺俊宗再奉詔討  
于佐沼山中而殪焉廬之構一堂上安大土像在  
方名號大武峯戮其餘黨於七處其一曰箕峯其  
二曰湊津牧山其三曰水越長谷其四曰鱗淵華  
足其五曰南部三閉其六小迫其七富山各建閣  
以爲護國鎮守蓋所以賽鈴鹿懇禱之應者乎仍  
俊宗置酒勞士卒藏弓矢歸京師云

按記緣起末曰承應三年甲午其文拙其說渾



妄誕浮詞故考之以辨焉下皆舉古史以証之  
考大系圖自坂上景家犬養菊田丸田村丸至  
廣野尚道尚常好陰是則望城其次序如此與  
分註說大異

俊仁乃誤利仁者也非坂上姓焉藤原姓也且  
俊宗之事世所傳皆非也詳俗說辨

田村東征或曰桓武帝延曆十九年冬十月令  
坂上田村麻呂點檢所分散諸國奧州夷賊日  
本後紀桓武延曆二十年紀曰二月丙午征夷  
大將軍坂上田村麻呂賜節刀十一月乙丑詔

曰陸奧國乃蝦夷等歷代涉時天侵亂邊境殺  
畧百姓是以從四位上坂上田村麻呂大宿禰  
等乎遣天伐平掃治之牟流云

廿一年正月甲子陸奧國三神加階緣征夷將  
軍奏靈驗也以此考之則田村平素信鬼憑神之志可見焉

丙寅遣從三位坂上大宿禰田村麻呂造陸奧  
國膽澤城夏四月庚子造陸奧國膽澤城使  
田村麻呂等言夷大墓公阿豆利為磐具公母  
禮率種類五百餘降秋七月甲子造陸奧國  
膽澤城使田村麻呂來夷大墓公二人並從



八月丁酉斬夷大墓公阿豆利爲磐具公母禮  
等此二虜者并奧地之賊首也

嵯峨帝弘仁二年夏五月丙辰坂上大宿禰田  
村麻呂薨粟田別業時年五十四田村麻呂從  
三位右京大夫兼右衛門督刈田麻呂子正四  
位上犬養之孫身長五尺八寸胸厚一尺二寸  
目如養鷹鬚編金絲有事而重身則二百一斤  
欲輕則六十四斤減二百三十七斤隨心所欲怒目轉視  
則禽獸懼伏平居談笑則老少馴親昆沙門化  
身來護我國延曆四年十一月癸巳叙從四位

下時年二十八六年三月丙午兼內匠助九月  
丁卯爲近衛少將七年六月甲申任越後介九  
年三月丙午轉越後守十五年正月廿五日任  
陸奧出羽按察使兼陸奧守十月甲辰兼鎮守  
府將軍十六年十一月二十日任征夷大將軍  
十七年閏五月癸酉授從四位上十八年五月  
叙近衛權中將二十年十月乙丑至從三位十  
二月轉中將廿三年爲刑部卿廿四年六月廿  
三日任參議廿五年四月十八日爲中納言勳  
二等同月廿三日兼近衛大將大同二年八月



十四日兼侍從十一月十六日兼兵部卿四年  
三月廿九日叙正三位五年九月十日任大納言  
庚申宣詔賜坂上大宿禰田村麻呂從二位  
野史曰二十年陸奧國夷賊高丸及惡路王起  
達谷窟至駿河國清見關於是征夷大將軍坂  
上田村麻呂賜節刀發京師高丸退歸奧田村  
麻呂追到陸奧射高丸於神樂岡斬惡路王國  
內平

按日本後記舉田村始末如前條唯言是歲  
二月賜節刀而不記高丸惡路王起達谷十

一月言遣田村麻呂而伐平掃治之事而不  
記殪高丸於神樂岡之義與野史說不合焉  
且大武丸事前後不相見

東史曰文治五年九月廿八日幕下自平泉  
赴多賀途有一青山號田谷窟是田村麻呂  
利仁等將軍奉詔征夷賊首惡路王并赤頭  
等構塞之巖窟也

百將傳曰藤原利仁者延喜之時率兵討奧  
賊風雪之夜乘敵無備擊平之

名將傳曰藤原利仁者勇力絕衆輕捷如飛



醍醐朝當關東盜賊起奉勅往捕之會天大雪利仁夜潛兵襲其落賊果無備大克斬首萬級威名大震迨奧州夷賊起又令利仁拜鎮守府將軍征討之事所至洊克功名速成而還朝廷賞之剖符於越前世々無絕由是其胤竟盛于北越

按田村丸利仁事實如此然混爲一人或愚昧之徒以田村爲氏以利仁爲名作緣起者亦陷此妄說而并二人混兩姓之拙遂臻茲且夫若師鍊釋書取事實渾不據正史故於

延鎮傳雖記高丸之事而不載大武丸之事於是作緣起者之識須推而知焉

此次具考田村之事實官爵極人臣之榮武毅出男兒之倫功鳴于闔國聲盛于海內可謂固一世之雄也如今至讀毘沙門化身來護我國始知時人有斯言而共比其威于多門勇猛神速已亦聞而喜之平素以此自負主張者可察焉自此一念言則所崇之者佛像所事之者堂舍故到處建大悲閣在處置多門堂其費亦抑幾何哉嗚乎甚哉言其謬



誤之原則僅出于方寸之差而每々認心于此累情于此致力于此施功于此空毀一生之心術遂賊終身之德行已雖抱英雄之器而秀等輩未得陷愚昧之域而脫不學之識采筆之史亦伺而昏故筆之書而貽臭于千載也歐陽公有言曰今八尺之夫被甲荷戟勇蓋三軍然而見佛則拜聞佛之語則有畏慕之誠者何也彼誠壯佼其中心茫然無所守而然也一介之士眇然柔懦進超畏怯而聞有事佛者則義形於色非徒不爲之屈又

欲驅而絕之者何哉彼無佗焉學問明而禮義熟中心有所守以勝之也嗚乎令此義曉之則田村之雄才胡爲迷彼淫此安身乎異端而取訕乎後世哉潛爲斯人惜焉故吐露情實以述其所思于此丈夫者豈不取之耶

### 新山古館

在若柳村驛口嘗言大古此山一夕涌出仍曰新山河上架橋通于福岡此地往時義家朝臣東征次軍之地也後屬葛西與大崎屢接兵山南出野義隆兵日強葛西弟寺崎式部大輔令家臣千葉



豐後移此而守之其先在磐井郡、峠村、北館、豐後裔降民間在若柳村世能守家業勤農事貢賦稅惠親族且廉直而有陰德故鄉黨稱善人焉

### 馬籠

在驛南往昔義家次軍之時士卒設土窟養馬之處也或曰盜乘兵亂盜人家馬而藏于此者也有土籠寬文中猶存焉

### 蒼樹泉

在新山八幡社下其水出于樹底蒼蘚中仍稱蒼樹泉

### 平野神社

在若柳村仁德帝時世所創立也爾後葛西清重再興之

### 莊嚴寺

在小林村山號虛空山玉造郡三町目之間也相傳此地古之小野小町生產之處也門前有若宮八幡叢祠仍曰若宮崎寺前古昔有池有巨蛇年々以美婦爲牲焉一女子以奇計殺之座其屍于此建寺置虛空藏而稱莊嚴寺事詳玉造柳池寺中藏空海所畫兩界曼陀羅及阿字一篇文是



嵯峨帝宸翰也。如今其寺荒廢，往年舊物多爲盜所掠，畧殘處亦幾亡失也。阿字贊曰：上有文下念彼蓮華，處八葉，鬚藻敷葉臺。阿字門，焰鬘皆妙光輝，普周遍，照明衆生。故如今會，千電持佛，巧色形深居圓鏡中，應現諸方。所積如淨水月，普現衆生前，知心性如是，得住真言行。以阿字門，作出入息三時，思惟行者爾，時能持壽命長劫住世。阿字門，一切諸法，本不生故者，阿字是一切法教之本。凡最初開口之音，皆有阿聲。若離阿聲，即無一切言說。故爲數聲之母。凡三界言語皆依於名。

而名依於字，故悉曇阿字名爲衆字之母。當知阿字真言亦復如是。如是觀察時，則知本不生際，是萬法之本。若見本不生際者，即是如實知自心。如實知自心，即是一切智智。故毘盧遮那唯以此一字爲真言也。佛從平等心地開發，無盡莊嚴藏。大曼荼羅已還，用開發衆生平等心地，無盡莊嚴藏。大曼荼羅妙感妙應，皆不出阿字門。當知感應因緣所生方便，亦復不出阿字門。

右一幅所傳不分曉，或曰宸翰也。仍論曰：或曰空海阿字上之贊詞相傳嵯峨帝之宸翰。



也今按斯文也一事無可其徵者矧無印璽之  
左証乎尤可疑者也曰予今閱此文詞蓋足以  
爲真翰矣夫阿字之爲義由來佛氏之所稱真  
言之所崇凡俗之輩信之如鬼神畏之如蛇蝎  
浮圖釋門亦進則專拜禮退則盡戰栗且夫空  
海乃釋徒之巨擘信之亦莫以加焉今於其贊  
詞也自信仰恐懼者言之則雖三蹟之徒奚對  
此圖上容易加贊詞妄意落濡毫哉况其餘之  
凡筆俗書乎然則當之者非至尊則豈輒加褒  
贊輕下筆簡耶 帝由來以善書聞于世且平

日與空海頡頏于其聲名低昂其技能焉於是  
乎自作字揮毫者尤所以不可疑也至無印璽  
者則斯時世未嘗用印行而爲證也審矣豈不  
信其宸翰乎哉



